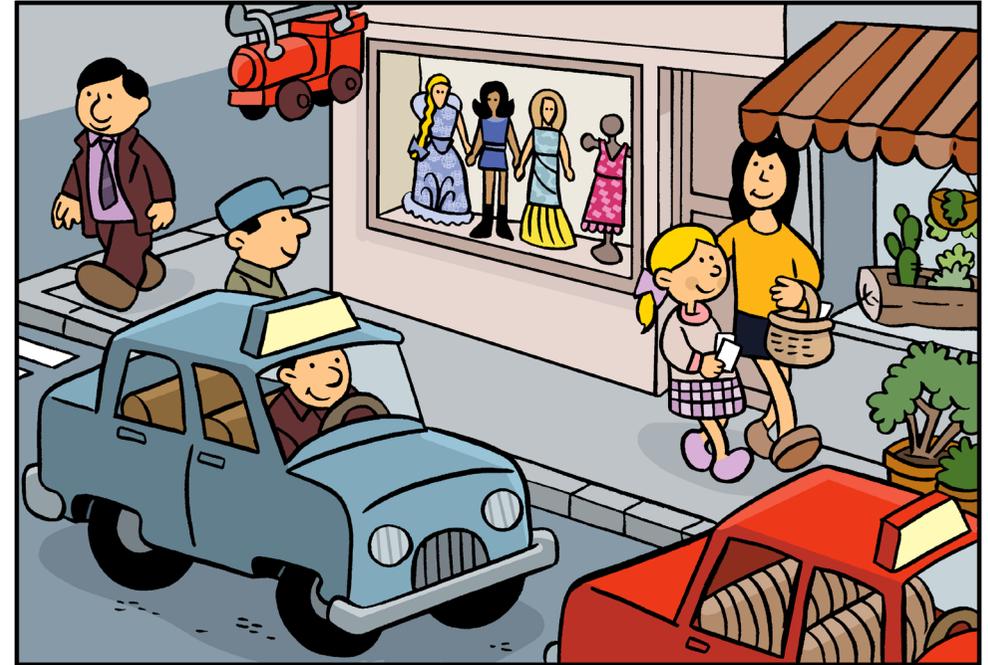
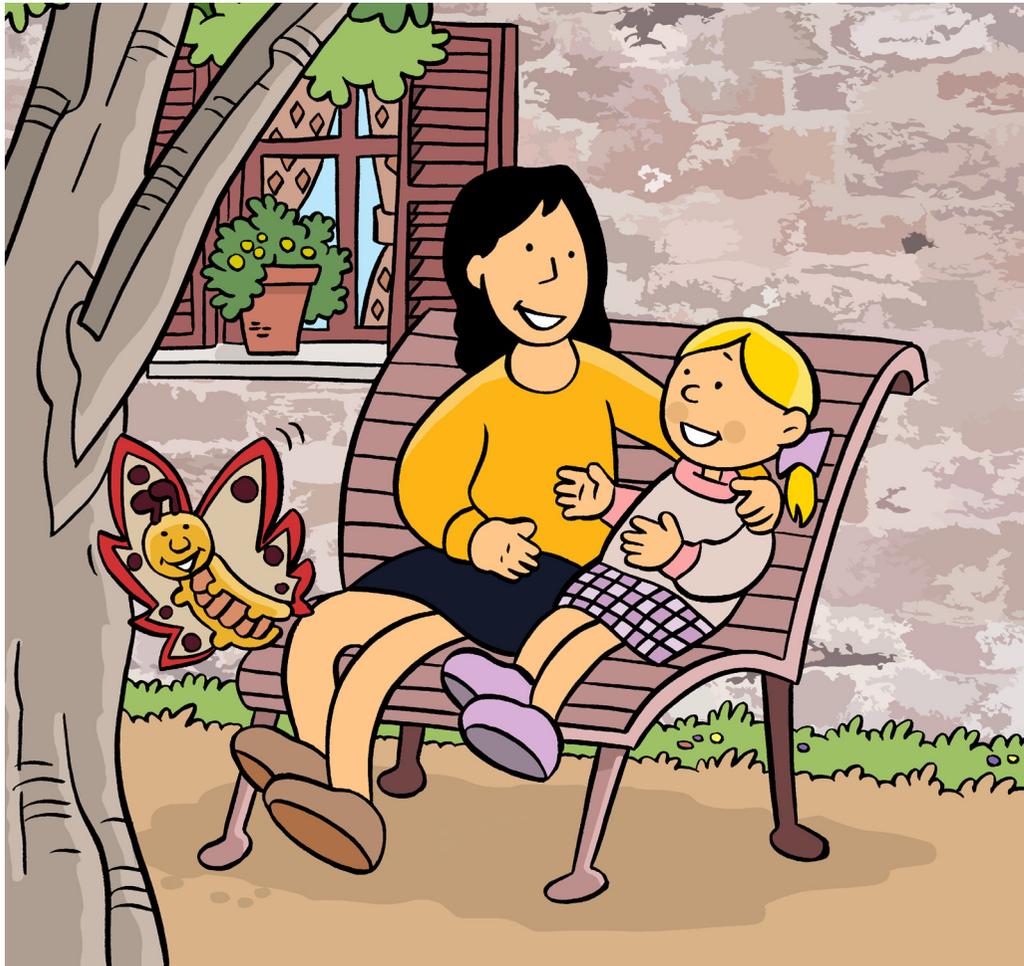


# ひとすじの陽光

「ルーシー、午前中に用事で出かけるけど、いっしょに行きたい？ おばあちゃんのたん生パーティーのために、友だちのモリーにお花の相談をしたいの。その後、少し買い物もするんだけど。」とお母さんが言いました。

「モリーさんのお花って、最高にきれいなね。今すぐ用意するわ。」と、ルーシーが答えました。



ルーシーとお母さんがモリーのフラワーショップに着くと、モリーさんは悲しそうです。

「どうかしたの？」とお母さんがたずねました。

「お母様のたん生パーティー用に注文したボタンの花がアリだけで、大部分かれちゃってたのよ。全くひどいわ。ほかにボタンがないか、あちこち電話してさがしてみただけど、まだ見つからないのよ。ごめんなさいね。」と、モリーさんが言いました。

「まあ！ ボタンは、母の大好きな花なのよね。」とお母さんが言いました。

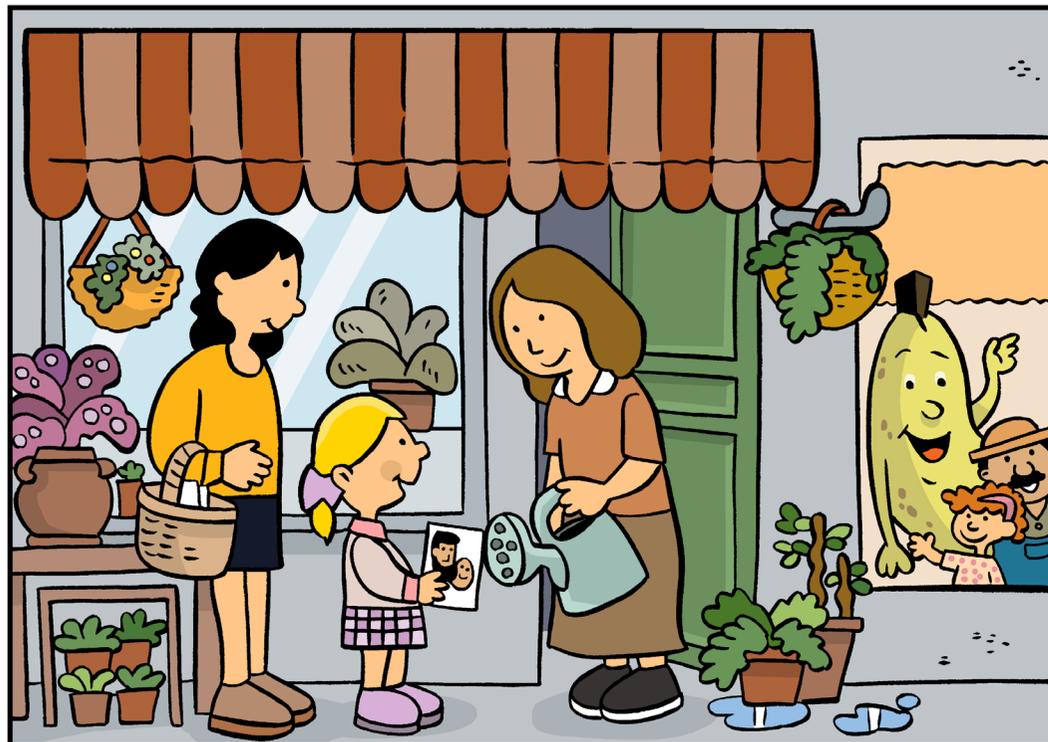
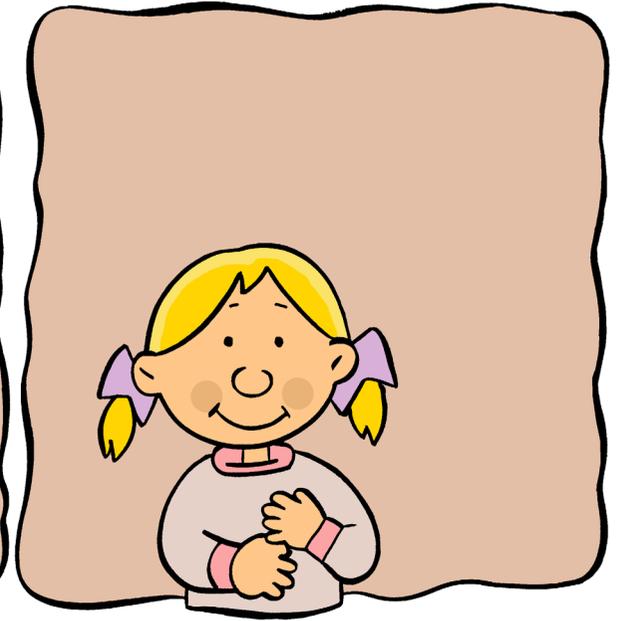
ルーシーは、何かできないかなあと思いました。モリーさんに気まずい思いはさせたくないけれど、おばあちゃんにもたん生パーティーで喜んでもらいたいし。その時、ルーシーはあることを思い出しました。

「がっかりしないでください、モリーさん。おばあちゃんは、ポタンは大好きだけど、オリエンタル・リリーもお気に入りだって言ってました。」

「そうだったわ、ルーシー！ 昔、よく庭で育ててたもの。」お母さんがこうふんして言いました。

「そうなの？ それなら、昨日入ってきた見事なのがあるわよ。ワックスフラワーとシダを合わせれば、すてきなアレンジメントができるわ。予定通り、夕方の5時までに用意できるわよ。」と、モリーさん。

「それは助かるわ、モリー。テレンスに取りに来てもらうわね。ありがとう。」と、お母さんが言いました。



「ルーシーのおかげよ。オリエンタル・リリーのことを思い出してくれて、本当に助かったわ。」モリーさんがほほえんで言いました。

「モリーさんのフラワーアレンジメント、とってもすてきです。おばあちゃんもきっと、喜んでくれます。」と、ルーシー。

「やさしいのね、ルーシー。ありがとう。」と、モリーさんも言いました。

お店に向かいながら、お母さんが言いました。「助かったわ、ルーシー。やさしいのね。おかげで、モリーさんも元気になってくれたし。おばあちゃんも、このフラワーアレンジメントを気に入ってくれるとおも思うわ。」

「モリーさんの役に立てて、良かった。みんなを幸せにするの、楽しいわ。」と、ルーシーも言いました。

みせ につくと、ルーシーは 店長の シモンズさんに 明るい 笑顔で あいさつ  
しました。「おはようございます、シモンズさん。今日は、野菜と果物が  
生き生きと していますね。新しい 配置、すてきです。」

「おや、ありがとう、ルーシー。やさしいだね。」と、シモンズさんが  
言いました。

とちゅうで 顔見知りの 人に 会うたびに、ルーシーは あいさつを して、親切な 言葉を  
かけました。パン屋さんでも、カウンターに 行くと、「ジャックさん。お店の中、すごく  
おいしそうなおい です。わたし、町中で この お店が 大好きです。」と 言いました。

「おやまあ、ありがとう、ルーシー。お店を 気に入って もらえて うれしいよ。  
今日は 何を おさがしかな？」





ルーシーのお母さんは、パンとお菓子を注文しました。お店を出ようとすると、ジャックさんがルーシーに紙袋を渡して言いました。「これはルーシーに。毎タルト、大好きだったよね。やさしい言葉をかけてくれて、ありがとう。おかげで、1日が明るくなったよ。」

「うわあ、ありがとうございます！」と、ルーシーはお礼を言いました。

ルーシーとお母さんが帰る時には、ジャックさんはお店の入り口まで出てきて手をふってくれました。

お母さんが言いました。「えらかったわ、ルーシー！ 今日会った人たちに親切で思いやりがあったわね。モリーさんの役にも立てたし、シモンズさんにもやさしかったし、ジャックさんもお店をほめられてとてもうれしそうだったわ。

今日会った人たちにとって、あなたはひとすじの陽光みたいだったわ。」

「周りの人たちに喜んでもらえて、うれしいな。みんなが幸せでほほえんでいると、わたしもうれしくなっちゃうわ。」

あなたも、親切な言葉をかけたり、ちょっとしたお手伝いをして、だれかにとってひとすじの陽光のようになることができます。あなたが小さな子供でも関係ありません。あなたのちょっとした親切が、ちがいをもたらすのです。

